
雲の彼方

折田直

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雲の彼方

【Nコード】

N6716S

【作者名】

折田直

【あらすじ】

広田祐里、25歳。パリ在住の孤独なフリージャーナリスト。ある晩秋の日、吹雪のアルプス山中で倒れている青年ジョエルに遭遇する。助けて車に乗せるが、ジョエルには謎めいたことが多く、祐里は戸惑う…。

フランスを舞台に二人の青年の心の交流を描きます。ボーイズラブ要素を含むファンタジーです。

1 吹雪の峠にて

第1話 吹雪の峠にて

それまで彼は一度として、自然の天候に超常現象的な何かを感じたことなど無かったのだった。

吹き荒れる風、雨、雪にしても、すべては気温と気圧と湿度の差、それに地球の自転を足した所から生まれる自然の現象に過ぎないのであって、

人を超えた存在の怒りや悲しみを伝えている、とか、あるいは何かの凶兆であるとか、

そんなものは信じる理由がないと思っていた。

気象にまつわる迷信の類には、これまでついぞ興味を見出せないできたのである。

11月1日、万聖節と呼ばれる祝日に土日が続いた週末、

フランスアルプスの中心の町、シャモニーからモンブラン・トンネルを抜け、

プチ・サン・ベルナールの峠道を越えて行くうちに、前方が見えないほどの吹雪に遭遇した。

その時も彼は、冬の到来を目前にした標高2000mを越すアルプスの峠なのだから、

突然の風雪もやむを得ない、というぐらいにしか思わなかったが、タイヤチェーンすら持参していない身としては、実の所、体が震えてくるほどの不安に襲われたのだった。

広田祐里、25才、日本人である。

フランスのパリに住んで一年半が過ぎようとしていた。

身分としては、一応、フリー・ジャーナリストにあたるだろうか。

もつとも少々ジャンルが限られたジャーナリストである。
より正確に言うなら、旅行記者というところだろう。

主に旅行雑誌やガイドブックのための記事、地図の情報などをパリ及び近郊で取材し、

日本の出版社に提供していた。

物書き、というほどのものではない。

パリで手に入る情報なら何でも扱う、言うなれば「便利屋」のようなものである。

学生の間にも一年弱、パリの短期大学の一つへ留学のようなことをしたが、

その経験だけで、卒業後いきなりこの異国の街に住む決心をしたのは、

少しばかり無謀だったかもしれない、と最近祐里は思う。

日本にいた頃、大学の他に語学学校へ通って習ったフランス語は、日常生活を送れる程度の役には立ったが、

いざ取材、となると、能力不足を実感することが多かった。

何よりも、その気後れが、この街では障害なのだ。

パリの仕事人たちは、決して始めから愛想のいい連中ではない。

相手に隙を見せずに、いかに少ない時間で用件を済ますかという所に、常に執着している風である。

つまりお役所的で、しかも人の成りを見て態度を選ぶ。

それは彼らが人生の中で仕事に割く時間を最低限にしたいと思っ
ているから、なのであろうが、

往々にして体格と顔の造りの貧弱な、彼らから見たらまだ成長しき
らない子供のような東洋人の若造が、実のある話を引きだすために
は、それ相応の迫力と話術が必要だった。

それだけ多大なエネルギーを要求されることになるのである。

晩秋の三連休に時代物のプジョーの中古を乗り出して、アルプスの

山岳地へと向かったのは、
そんな気疲れする毎日からの逃避願望だったに違いない。
もちろん、一人きりだった。

旅の道連れは、ミシユランのどちらも分厚くて重い、大判の地図帳
と赤いホテル・レストランガイドだけ。

仕事とは関わりのない、山村の田舎道を行くつもりでいた。

なのであえて有名な観光地を避けた。例えばジュネーブ、シャモニ、アヌシーなどを。

ドライブの道中はおおむね胸のすくような感動的な景観の連続だったが、

ただ一つだけ大事な注意点を見落としていたことに途中で気づいた。
11月のアルプスには雪が降る、という、至極当たり前の常識を。

プチ・サン・ベルナールの峠は、登り上げた鞍部が、日本の峠のよう
な痩せた尾根にはなっておらず、比較的平らな広い平原状になっている。
ている。

かつて高校の地学で習った隆起準平原という用語が思い出される。
その小丘を散らした緩い起伏のある平原が、今は渦巻く白い霧と吹
雪に塗り込められ、

その奥からプジョーの車体を浮かせるほどの凶暴な風が吹きつけて
くる。

固い氷の結晶がフロントガラスに当ってパラパラと乾いた音を立て
た。

アスファルトの路面には雪粉をはらんだ風が白い渦や風紋を描きなが
ら

這うように流れては道の彼方へ駆け去って行く。

その強風が幸いしてか路上にはまだ着雪の気配はない。

が、道路脇の草地には、すでに薄い新雪が溜まり始めていた。

ミシユランの道路地図によれば、台地状になった高原の尽きる先は、

約700m下った麓の町まで、羊腸のごとき、と言う表現がぴった
りな葛折れの難路らしい。

先を急がなければならぬ。

そんな急勾配の下り坂にさらに雪でも積もってしまえば、

どうしたって来た道を引き返すか、道端に車を捨てて公共交通機関
に頼る他ない。

それにまもなく陽が傾く。

秋の短い日が暮れる前に、スリル満点の山道のドライブは終わりに
しておきたい気分だった。

それは峠の標識の立つ石積みのお堂の脇を過ぎた頃だった。

突然、吹雪の渦巻く目の前の路上に人影が踊り出た。

雪と霧の中から抜け出したかのような白づくめの服装の人物。

度肝を抜かれ、思いきり急ブレーキを踏む。

幸いなことに、車体が物に当る衝撃音は来なかった。

白い人影はそのまま反対側の草地に倒れこんだようだ。

祐里は車を脇に止め、ハザードランプのスイッチを震える手でもど
かしく押し込んで、

ドアの外へ飛び出した。

何という風。

逆巻き渦巻いて、着ている服はおろか、髪や皮膚までももぎ取られ
そうな勢い。

それにこの音。

地を這う低い唸り声、あるいは甲高い悲鳴や泣き声にさえ聞こえて
くるのは、

混乱した心理状態のなせる悪戯なのだろうか。

真実、恐ろしかった。

自分に向かって押し寄せてくる風雪に、殺意のようなものを感じた。
風の発する源は、霧の向こうに隠された、計り知れない異世界であ

るかもしれない、
などと根拠も無く思った。少なくとも、そう感じた。

雪に覆われた草地に手について、その白い人影は懸命に身を起こそうとしていた。

近寄るにつれ、実際にはごく白に近いサンド・ベージュのトレンチコートを身にまとっていることがわかった。

思うように腕に力が入らないのか、もう一度雪の中へ倒れこむ。やはりどこかに傷を負ったのだろうか。

「大丈夫ですか？」

手で雪を避け、道を横切ってゆきながら祐里はその人影にフランス語で声を掛けた。

振り返った顔は風に乱れる淡い色の金髪に縁取られ、驚いて見開かれた瞳は黄昏の空のような薄青色だった。

まだ若い青年である。

祐里は彼に駆けよって、腕を取り助け起こしながら言った。

「すみません。視界が悪くて気づくのが遅れました。どこかに怪我を？」

華奢な体つきに思えた。

それに2000mの雪山にはおよそふさわしくない軽装だった。

春物のように薄いトレンチコートの下は、同じように薄い麻のスーツでもあるらしい。

青年は苦しげに息をつく。

「いえ…悪いのはこちらです。急に飛び出したんですから。

車に当たったわけではありません。ただ少し、具合が……。手を貸して頂けますか。」

そう言ってまた崩れ落ちそうになる。

とりあえず車の中へ、と腕を肩に回した時、その細い体に走る震えに驚いた。

凍えているのかもしれない。

この薄着では無理もない。

それにますます激しくなる吹雪は、まったく、二人を標的にして危害を加えたがっているとしたか思えないような勢いである。

顔にぶち当たってくる雪粒を片手で遮りながら、そう重くはない青年の体を抱え、

懸命に道を横切り車の助手席に乗せこんだ。

暖房のパワーを最大に上げて、後部座席に投げてあったケットを青年の身体にかける。

ありがとう、と微かに礼を言うその顔は、着ているコートの色と同じくらいに白い。

そして目許がつらそうに歪められ、口からは荒い息が洩れていた。

「一人ですか？ 連れの方は？」

「・・・いません。」

「よかつたら麓の町まで送りましょう。病院へ行つた方がいい。」

シフトレバーを握りながら祐里力が言う、青年は溜息を洩らし、

「迷惑をかけて申し訳ありません。とりあえず麓まで乗せて行つて頂けますか。」

あとは何とかなると思いますから。」

そう答えてすぐに、力尽きたようにシートに身体を沈めた。

急な勾配の下り坂をエンジン・ブレーキを目一杯使つて、

気の毒なブジョーのご老体があえぎあえぎ下り始める頃、

フロントガラスを覆っていた厚い霧の向こうに突然チラリと青い光のような物が見えた。

次のヘアピンカーブにさしかかる時には、それは青く光る小さな湖の姿に変っていた。

麓の町、ブル・サン・モーリスだ。

晩秋の午後の陽光を浴びて、湖と街とが小さな宝石を寄せ集めたようにきらめいている。

やがて少しずつ雲間が切れて、綿のように厚みのあった雪雲は、視界より上の方へと退き去って行った。

と、突然、雲の下辺から太く黄金色の光の筋が、そびえる巨大な山塊の尾根をかすめ、

広く奥深い氷河谷を斜めに断ち切り、谷底の牧草地へと降り注いだ。どこかで羊の鈴の音がする。

斜面から突き出た小さな岩山の上には、岩と同じくらいに古く堅く頑丈そうなチャペルが建てられ、

その尖塔が光の道筋を遮り屈折させて新たな光陰を谷間に長く投じるかのようだ。

旧傾斜に伏せるようにして建つ石積み of 古い家屋の煙突からは、夕べの青白い煙が黒々とした山影を背景に細く長くたなびいていた。心に染みる、美しい情景だった。

助手席の見知らぬ同乗者もまた、無言でそれを見つめていた。

ブル・サン・モリスの町に入る頃には、晩秋の短い日はほとんど暮れかかっていた。

谷あいのこの小ぢんまりとした町は、冬にはウィンタースポーツ基地として賑わうらしく、ロッジ風の建物がそこかしこに見られた。一方でいかにも厳しい風雪と歴史とに耐えてきたような、石積みの古めかしい建物が多く残っている。

この程度の規模の町であれば、おそらく設備の整った医療機関もあるのではないか。

車を止めて誰かしらに尋ねよう、と祐里はと考えた。

しかしその前に本人の意志を確かめるべきだろう。

山をくだる間、ずっとまぶたを閉じていた助手席の青年は、

今は薄く目を開いて、物憂げに窓の外の町並みを見やっている。

間もなく通り沿いに観光案内所の看板と明かりが見えたので、道路脇に車を寄せてサイドブレーキを引いた。

「病院の場所を聞いてきます。」

祐里が降りる支度をしながらそう言つと、青年は腕で支えて難儀そうに身体を起こし、

「いえ、ここで結構です。あとは歩きますから。」

車のドアに手をのばして外へ出ようとする。

「だけど、そんな様子じゃ無理でしょう。」

とても歩き回れる状態には見えなかったので、祐里は少し語気を強めて引きとめた。

「どこか行き先があるのなら、そこまで送りますよ。」

駅ですか？ それともホテル？」

青年はドアに手をかけたまま、祐里の方へ顔を戻して影の射したまなざしでじつと祐里を見つめ、やがて深い溜息をついた。

「では…どこか適当なホテルへ。手配をお願いしてもいいでしょうか。」

祐里はもちろん快くうなずいて案内所の窓口へ向かった。

訊ねてみたい事は山ほどある。

なぜあんな吹雪の峠に全くふさわしくない服装でいたのか。

どこからどうやってあの峠まで来たのか。

そして、これからどこへ行こうとしているのか。

しかし、考えてみればあくまでも、出会ったばかりの見知らぬ相手なのだった。

はからずもこうして同宿する事にはなったが、おそらく明日になればまたそれぞれお互いの行くべき場所へと向かう。

立ち入ったことを聞くのは、結局、自分自身の好奇心を満たすためでしかないように思われた。

案内所で予約を入れた宿へ車でたどりついてみれば、
落ち着いた雰囲気の木の手りのするログハウス風のホテルだった。
館内は静かで他にさほど多くの泊り客がいるようには思えない。
親しい間柄ではないので、本来なら別々の部屋をとるべきなのだろうが、

青年の容態が気遣われた。

他人だから、と言ってしまえばそれまでだが、

こういう状況で知らぬ振りを出来ないのが彼の性分らしい。
物心ついて以来の性質を今さら変えられはしないので、仕方がないと諦める以外なかった。

ツインルームの二つあるベッドの一つにコートと上着を取って横になり、

金色の髪と青い瞳の青年はとても不安そうで戸惑っているように見えた。

「ご迷惑をかけてすみません。

こんなにして貰うつもりはなかったんですが。

身体が言うことを聞かなくて、申し訳ないと思っています。」

祐里は、何でもないと言うように、ちょっと肩をすくめて見せる。

そう、フランス人がよくやる風に。

「具合の悪い時はお互い様です。

どちらにしても今日はこの近辺に一泊するつもりだったんです。

とにかく気ままな一人旅ですから、気にしないで下さい。」

青年は祐里の言葉にゆっくりとまつげを伏せ、

その顔から微笑みを消して行った。

「ありがとう。いい人に出会えて助かりました。

さもなければ、私は今もまだあの吹雪の中に倒れていた事でしょう。

「

思いつめた表情で、恐怖感を甦らせたかのように震える息を継いだ。
「わけがあつて詳しいことは言えないのですが、

仕事上のトラブルで、あのような醜態をお見せすることになりました。

正直を言えば何故いきなりあんな場所にいたのか、自分でもよく覚えていないのです。」

遠いまなざしで独り言のように言った。

「覚えているのは何も見えなくらい激しい吹雪に巻かれてただ途方に暮れていたことと、

一つの方角に見えた光に向かって行ったことだけです。避難できる建物でもあるかと思って。

そして気付いたら貴方の車の前に飛び出していた。」

そう言えば雪で視界が悪かったので、車のヘッドライトをつけていたかもしれない。

思いめぐらす祐里に、青年は毛布から右手を出して差し伸べた。

「申し遅れました。ジョエルといいます。あなたに神のご加護が在りますように。」

その手を遠慮がちに握って祐里ははにかみながら笑った。

ひんやりと冷たく、滑らかな手だった。

「広田 祐里です。よろしく。」

「ユウリ、アジアの方ですね。」

「日本です。」

「日本・・・こちらへは旅行で？」

「いえ、一年半前からパリで暮らしています。」

「ああパリに。どうりでフランス語がお上手だ。」

思うように力が入らないらしい彼の手をそっと毛布の下に戻してやり、

祐里はジョエルと名乗った青年を気づかわしげに見つめる。

「もう、休んだ方がいいですよ。顔色が良くない。

話なら後でいくらでもできますから。」

ジョエルは素直にうなずいている。

「ありがとうございます。」

毛布を顎まで引き寄せて、溜息とともに目を閉じた。

祐里は彼の息使いが深く落ち着いて行くまで、隣り合う寝台の端に浅く座って、広げた地図を見ると装いながらそっと見守っていた。

こうして見るとジョエルはどこか存在感が希薄で、すぐにでも消えてしまいそうにさえ見える。

体調がすぐれないせいなのだろうか。

かならずしもそうとばかりは言えないだろう。

本質的な生命感、つまり生きる気力が不足しているように思えた。何か計り知れない大きな失意のうちに沈んでいるかのように。

深夜、ふと目を覚ますと、窓の外には白い影がちらちらとして湿った雪が静かに落ちているらしかった。

わずかに明かりを残してある部屋に、

時折かすかなうめき声が洩れて、

それがこんな寢静まった時刻に目を覚ました理由であるらしい。

寢床を出て隣の寝台に身を屈め覗きこんでみれば、きつく毛布のうちに身体を縮ませたジョエルは、乱れた息遣いでうわごとを口に出している。

“ Mon Pere … (お父さん) ”と。

夢うつつに彼の父親に何かを訴えるらしい。

あるいは悪夢から逃れようとするあまりの呼びかけなのか。

心の内の恐怖を物語るように、

ジョエルの額には薄く汗がにじんでいる。

祐里は彼の眠りを妨げないよう、そつとその額の汗をタオルで拭い、手を当てて熱の無いことを確かめてから、

枕の端をきつく握りしめているジョエルの白い手に、ためらいがちに自分の手を重ねて包むようにした。

おそらく自分が同じように苦しい時も、
誰でもいい、そばにいて手を握って欲しいと願うだろうと思ったか
ら。

たとえ見ず知らずの相手でもいい。

ただほんの少しだけ、自分という存在を大切に思ってくれさえすれば。

人間としての生きる苦しみを同じように共有する者として。

気のせいかもしれないが、ジョエルの息使いは少しばかり安らいだ
ようだ。

夢の内側で彼の手を握り心を慰めるのは誰だろう。

彼の求める父親か。

それとも彼を愛して止まない、他の誰かか。

願わくばせめて夜が明けるまでの短い間、彼の眠りが安らかであり
ますように。

翌朝、祐里が目覚めた時には

ジョエルはすでに身支度を整えて窓際の椅子に腰かけていた。
体調の回復を物語るように

穏やかな微笑みさえ浮かべて。

寝不足気味で重い目をこすって、あくびと伸びをしながら祐里は苦
笑した。

「よかった。一晩でずいぶんよくなったみたいですね。」

ジョエルは腕を上げてリフティングのポーズをしてみせる。

「ええ、すっかり回復しました。貴方のおかげですよ。」

それから椅子を立てて祐里に歩みより、ベッドのすぐ脇に立った。
背筋を伸ばしてスッと立つその姿は、

彫刻のように均整が取れていてしかもどこか気品が感じられた。

ラフなシャツ姿であるにもかかわらず。

「本当に感謝しています。今は時間がないのでちゃんとしたお礼ができませんが、

いつか改めて。貴方のお住まいを教えて頂けませんか。」

「いいですよ、礼なんか。」

辞退しようとするジョエルは真顔で抗議してくる。

「そうはいきません。命を救って頂いたのですから。」

祐里は根負けして肩をすくめた。

「それじゃ、パリに来ることがあつたら、僕のところへ寄ってください。」

祝杯を上げましょう。お近づきになれたしるしに。」

ジョエルはようやく笑顔に戻った。

「ええ、ぜひ。その日が楽しみです。」

S N C Fの駅から一番の汽車に乗ると言って、ジョエルは朝食も取らずに部屋を後にした。

少し多めのホテル代を残して。

薄い雪の残る早朝の通りをゆっくりと去って行く彼の白いコート姿を祐里はしばらく窓から目で追っていた。

できればもっと多くのことを話したかった。

考えてみたら、結局祐里は彼の住所も連絡先も聞いていない。

ジョエルは始めからかなり秘密めいた所があつて、

こちらから何かを訊ねることをためらわせたのだ。

それに相手の領域に踏みこめないのは、やはり祐里自身の変えがたい性格だった。

親しくなりたいと強く願うような相手に出会っても、積極的に意志表示が出来ない。

自分の気持ちをさらけ出した後に、相手からぞんざいに扱われてしまうことが耐え難く恐かった。

それで今の彼にできることと言えば、

こうして遠ざかる後ろ姿を気遣いながら見送ることだけだ。
そしてなるべく近いうちに、パリでジョエルと再会の機会に恵まれ
ることを期待しよう。

実現すれば今年の冬は孤独だった去年より、大分マシな日々になる
ことだろう。

静かな街に重々しく鐘の音が響く。

ホテルの横合いに見つけた教会は、

ひと抱えもあるような角ばった石をただ高く積み上げたいかめしい
聖堂で、

窓と呼べる箇所がほとんど見あたらない。

おそらくは風雪のせいだろうが、その石壁の人の高さほどのところ
に散在する、

えぐられたような小穴が、どうしても銃痕に思えてしまうのは、
ただ彼自身の抱く文化的隔絶感が見せた幻想であろうか。

(第1話 吹雪の峠にて 終わり)

1 吹雪の峠にて（後書き）

ファンタジー、といっても、派手な立ち回りなどのない、おとなしめの話になると思います。癒し中心です。よろしくお願い致します！

2 ダゲール通りにて

2 ダゲール通りにて

パリのダンフェール・ロシュローという地区に彼の暮らすアパルトマンはある。

モンパルナスからメトロで2駅ほど、環状線にも近いほぼ南のはずれだ。

この辺りを特徴づけているのはサルトルとボーヴォワールが眠るところと知られる広大なモンパルナス墓地、そして地下の旧採石場跡にぎっしりと身元の分からない古い人骨の詰め込まれた地下墓地のカタコンブ。

住みはじめた当初は、窓から見える墓石の林立と、地中の霊達の気配にずいぶんと気味の悪い思いをした。

が、考え直せばパリという街は、ローマ人の到来以降でさえ、悠に2000年の歴史の集積地であって、どの場所でも人が生まれては死に、それとは対象的に容易には壊れない石の建造物達が修復されつつ延々と利用されてきたのだ。

人の生死と過去の歴史が感じられない場所など、多分パリのどこにもありはしない。

そう思ったところで諦めがついた。

11月半ばを過ぎた土曜日、パリは雨だった。

夕刻、いつものように混雑したメトロの車内から、天井の低いムツとする生暖かさの地下ホームに吐きだされ、地下濠のような通路を通って最寄の出口から外へ出た。

この辺りはパリの中でも生活感のある地区だと思う。

パリによくある威圧的で大きな建物も、とかく敷居の高いブランドショップも見あたらない。

ただし、これだけは他と変らない、まるで怒濤のように車が走る大通りはある。

その大通りのあまり広くない歩道を人に混じって南へしばらくいくと、割りあい大きなスーパーがあつて生活に必要な物は何でも揃う。

そこから西へ折れればダゲール通りという名の市場通りだ。

野菜、肉、魚、チーズなどが狭い通りまであふれそうに並べられている。

丸のままの魚や殻付きの貝が山と積まれた魚屋では、Direct au Fecamp（フェキャンブ直送）と書かれたまるのままのニシンが本日の売り物らしいが、寒そうに順番待ちをしている黒いコートづくめの客達のお目当ては、何と言つても今が旬の殻付き生ガキであるらしい。

魚屋の親父さんに一つ、二つとビニール袋に入れてもらつては欧州通貨を渡している。

Belonと呼ばれる平べったいホタテに似たブルターニュ産の銘柄物は、やっぱり100gで他より1ユーロは高かった。

長円形の殻の普通のかきを半ダースだけ買うことにする。

一人分のオードブルにはこれで十分だろう。

メインディッシュは愛想のいい店主がなかなかの味を出している、中華惣菜屋の焼き鳥とチャーハンのテイクアウトに決める。

あとはあちらの角で朝食用に焼きたてのバゲットを手に入れるだけだ。

どこか東京下町の商店街のようなこの界隈を祐里は結構気に入っているのだった。

彼の部屋は家賃の安いグルニエ（屋根裏部屋）で、古い建物の最上階、3階にある。

日本式に言えば4階だが階段だけでエレベーターは無い。

天井は低く傾斜していて、決して広くはないが、日本の小ぢんまりした家屋に慣れた身からすれば、気になるほどではない。

北よりの窓からは雑然としたモンパルナス墓地の墓石群が、南よりの窓からはフランソワ・ミッテラン国立図書館の4つの塔が、煙突のように突き立っているのが少し重なって見えている。

もつとも今は日が暮れている上に雲が低く降りてきているから判然としない。

広くない部屋にはベッドばかりが場所を取っていて、他にはろくな家具や調度品もないが、パソコン、プリンター、ファックスなどがまとめて置かれた一角だけは

殺風景な部屋の中でしつかりと存在を主張している。

その場所が、いわば彼の仕事場というわけだった。

部屋の明かりに続いてパソコンの電源を入れ、起動を待つて日本の出版社からのメールをチェックする。

雑誌の編集部からは、新たにパリ市内の店舗の位置確認の依頼が来ている。

今日も午後からモンテーニュ通りまで出かけてずらりと並ぶブランド店の配置を
地図上にプロットして来たばかりだ。

遠く離れた日本では、実際の街並みを確認する確実な手段がないから、祐里のような存在が大いに重宝がられる。

別の担当者からは、地下鉄の新設路線についての問い合わせが来ていた。

そうした情報の確認から、記事の執筆まで、頼まれれば時間の許す限り何でも引き受ける。

それらはパリにいてこそその仕事で、言葉の問題など多少の困難は伴うにせよ、決して嫌いな作業ではなかったから。

一通りメールに目を通し、待ちきれずに開けたワインのグラスを片手に

オードブルのカキを用意するためキッチンへ戻りかけた。

ドアをノックする音が聞こえたのはその時だ。

この部屋に来客は珍しい。

まだパリに知りあいは多くない。

考えられるのはアパートの大家ぐらいだが、月末でもないし、第一、家賃はいつも早めにこちらから持参していて、何か急用でもないかぎり、訪ねてくることはない。

考えるうちに2度目のノックが聞こえた。

「どなたですか？」

恐る恐る訊ねてみる。

「こんばんは。ジョエルです。」

答えた声にはためらいがなかった。

そういえば今日は土曜日だ。

すぐにドアを開けて、半月前と同じ柔らかな金髪の青年と対面した。

「突然すみません。お邪魔では無かったですか？」

言葉とは裏腹に、ほとんど恐縮する様子の見えない人懐こそうな青い瞳に、

祐里はもちろん歓迎の笑顔で答える。

水滴の光るトレンチコート姿の青年を部屋の中へ招き入れた。

突然の再会に、少なからず心が浮き立って声まで弾む。

「こんなに早く来てくれるとは思いませんでしたよ。もう、具合はいいんですか？」

ジョエルはその整った顔立ちに微笑を浮かべる。

「ええ、すっかりよくなりました。おかげですぐに仕事に復帰することになって、

なかなか貴方のところへ伺えませんでした。」

祐里は笑った。

「早くよくなつて、何よりじゃないですか。

あの時は本当にどうなることかと心配したんですから。」
言われた当人も素直に肯く。

「そうですね。正直なところ、かなり大変な思いをしました。」

しばし言葉を途切らせて、それぞれに吹雪の峠とあの不安な一夜を
思った。

「そうそう、再会したら祝杯を上げるという約束でしたね。」

意識を現在に引き戻して祐里はグラスを上げてみせる。

「ちょうどこれから一人きりのディナーを始めようとしていたところなんです。

少しですがカキもありますから、まずはここで乾杯しませんか。それから外へ繰り出せばいい。」

ジョエルに異論は無いようだった。

よく冷えた辛口の白ワインで再会を祝した。

グラスを合わせて二口三口飲んだ後、

ジョエルはひと息ついて言うのだった。

「さて、君にお礼をしなくてはなりません。約束でしたからね。」
当然、祐里は辞退する。

「お礼なんかありません。僕が好きでやったことなただから。ちゃんとホテル代も頂いたし、これ以上何かを受け取る理由なんかありませんよ。」

ジョエルも後には引かない。ちょっと恐い顔で押してかかる。

「今日はそのために邪魔したんです。危ない所を救って頂いて、お礼もしないのでは、私の気が済みません。

何でも望むものを言つて下さい。できるかぎり、お応えするようにしますから。」

何でも、と言われても、素直に、はい、そうですね、というわけにはいかないのだ。

しかし、何でもいいのなら、逆に相手の負担にならないような物にすりかえることもできるのではないか。

ふとそう思い当たった。

金のかかるような物質的な物ではなくて、しかも相手の気持ちもおさまるような物。

そうなると“物”ではなく、“事”になるかもしれない。

祐里は胸の内で自分との相談をじっくりやってから、待ちわびているらしいジョエルの顔に微笑みかけた。

「どうしても、ということでしたら…一つだけ。」

ジョエルは嬉しそうに相好を崩して身を乗りだす。

「どうぞ。」

いざ口にする段になって照れ臭くなった祐里は目を伏せた。

「こんな事をお願いしていいのかどうか…。もし、無理なら言ってください。」

「ええ。」

「実は、今、パリのレストランを雑誌で紹介する仕事が入っていて、紹介する店を選ぶ参考に、匿名の客として行ってみたい店がいくつかあるんですが、

僕のような若輩で、しかも東洋人が一人で、となると、高級レストランはちよつと…。」

「ああ、なるほど。きつと、そうでしょうね。」

納得顔でうなずいて、ジョエルは先を促した。

祐里は咳払いを一つ。

「それで、もし貴方の知っている方で、こんな風采の上がない東洋人の僕と、

食事をしてくれるような心の広い女性がいるようでしたら、どなたか紹介して頂けませんか？

ご迷惑はおかけしないと約束します。一度だけでも結構ですし、もちろん、食事代はこちらで持ちますから。」

興味深そうに眉を上げて、ジョエルは祐里を柔らかく見つめていたが、

あまり待たせることなく、承諾の目くばせを送ってくる。

「わかりました。では、私の従妹を来させましょう。」

「え……？」

あまりに素早い返答に、言葉を失って相手を見つめ直してしまった祐里だった。

ジョエルが笑う。

「従妹です。ちょうどパリに滞在していますから、ご一緒できると思います。」

明日は日曜でレストランは休むところが多いですから、月曜の晩ではいかがですか？」

「あ、ええ、予定はありません。」

「では、7時にここへ来させます。それと費用の心配は無用です。」

ここに少しですが小切手を用意してきましたから。

ぜひそのディナーに使ってください。

そうでもないかと受け取って頂けないでしょう。どうか、これだけは受けとって下さい。」

祐里はもはや返す言葉も無く、すべて周到で手抜かりのない相手を呆然と見つめるばかりだった。

祐里の知っているフランス人は、もつと自己中心的で気分屋で感情的で、

少しでも面倒なことは進んでやりたがらないが、楽しいこととなると目を輝かせて情熱を注ぐ……。

簡単に言ってしまうえば、まあ、そんな風なのだが、

中にはこのジョエルのように冷静で献身的でまじめな人間もいるのだろうか。

こんな、人々の手本のような若者が、一体、この社会でどんな職業

に付き、

どんな役割を担っているのだろう。

「あまり詳しくは言えませんが…、」

連れだつて出かけた街中のビストロで職業を訊ねた祐里に対し、そんな前置きをしてジョエルは言葉を探すらしい。

「いわば、布教活動の一つだけということだけ申し上げておきましようか。」

布教活動、といえば、フランスでは一般的にはカトリックになるはずだが、どうなのだろう？

祐里の問いたげな表情に、ジョエルは鋭くが察して答えてくれる。

「カソリックです。パリではノートル・ダム寺院などへよく立ち寄ります。」

シテ島のです。いらした事がありますか。」

祐里は肯いて、ノートルダム寺院の太い列柱の並ぶ重厚な空間に思いをはせる。

「それじゃ、つまり神父さん…なんですか？」

そぐわない外見に迷いながらも口にした。

「いいえ、ちよつと違います。」

ジョエルの笑顔は何だか楽しそうだった。

「一言で説明するのは、なかなか難しい。そうですね、まあ、一種の伝道師みたいなものだとも思ってください。」

伝道師、と聞いた瞬間、フランシスコ・ザビエルという古めかしい名前が、

記憶のはるか彼方から飛び出してくるのを感じた。

その名から受ける大きな印象に目を丸くしていると、

ジョエルはますますおかしそうに目を細めて笑い、ポンと祐里の肩を叩いてみせる。

「大丈夫、今すぐ君に信仰を押しつけるようなことはしませんよ。」

日本の方は敬虔な仏教徒が多くて、説得にはたいそう時間がかかる

そうですから。

また今度、時間がある時にゆつくりと試みることにしましょう。」
冗談だか本当だか分からないようなことを言って艶やかに微笑み、
胸の前で目に止まらぬくらいの自然な仕草で素早く十字を切ってみ
せた。

夜も更けて、別れ際に、

あまり酔った様子のないジョエルに何気なく、彼の暮らしている場
所を訊ねてみる。

「うーん、それは難しい質問ですね。」

パリコレのモデルのように端正な青年は、そんなあいまいな答えを
口にして、

くつろいだポーズでミステリアスに微笑んだ。

「さきほども言った通り、布教活動が私の仕事ですから、
決まった場所には滞在せず、常に場所を変えながら旅をしているん
です。」

なので、簡単に言ってしまうえば、住所不定、と言ったところですね。

住所不定。何だかとてもなく捉えどころがない。

「それじゃあ、連絡を取りたい時は、どうしたら？ 携帯電話は？」

「一応、持っています。」

ジョエルは申しわけ無さそうに肩をすくめて見せる。

「ですが、世界中を飛び回っていると、携帯電話の使用条件はまち
まちです。」

通じる確立は低いと思いますが。」

それでも長い数字を羅列した番号のメモを手渡してくれた。

「ここ数日はパリにいます。」

祐里の手を握りながらジョエルは別れがたい様子で言う。

「時間がある時には、連絡してみてください。話の続きをしましょう。」

祐里は細い手を握り返して頷いた。

「ええ、ぜひ。」

本当にまだ、必要最低限のことさえお互いに知り合えてはいない。今からもう、次の再会が待ち遠しく思える祐里だった。

（第2話 ダゲール通りにて 終わり）

2 ダゲール通りにて（後書き）

ジョエルはどうやら…聖職者さんらしいですね？

ファンタジーは良く読みますが、実はあまり書いたことがありません。

ご感想をお待ちしています。

3 フラゴナールの聖母

第3話 フラゴナールの聖母

さて、彼にとつてパリへ来て以来、こんなに胸のときめくことは初めてだった。

いや、正直に言い直すことにしよう。

彼の25年間の人生で、女性と二人だけで改まって食事をするのは、ほぼ初めてのことと言ってよかった。

彼、広田祐里という人間は、生まれついて以来、自分からあまり人との関わりを求めない、引っ込み思案な性格なのだった。かといって、人が恐いとか嫌いとか言うわけではない。

相手の世界に踏みこんで、迷惑に思われるのが心苦しいのである。

そんな事になるくらいなら、ただ離れたところから眺めている方が、余ほいいと思うている。

それでも時には、たまらなく誰かに受け入れて欲しくなるのも確かだった。

関わってみたくもなる。

そんな一大決心をした時には、心拍数がほぼ倍増して軽い興奮状態になり、半分思考不能に陥ってしまうという欠点がある。

おそらく普段とは違う、慣れないことをしようとするから緊張してしまうのだろう。

今の彼がちょうどそんな状態だった。

夜7時、待ち合わせたモンパルナスの古いカフェのテーブルへ、

細身のシルエットが歩み寄る気配に目を上げた祐里は、

瞬間、そこにラファエルの聖母を見たと思った。

秀でた額、その下に可愛らしくまとまった目鼻立ち。

ジヨエルと同じ高い空のような澄んだ青をした瞳が、遠慮がちなが

ら人懐こそうに笑いかけている。
一つに結って高くまとめられた髪の色も、従兄と同じ、淡い金だった。

「シモーヌです。 はじめまして Enchantée」

椅子から立ち上がり、スツと差し出された細く白い手を取って、危うくその手の甲に口付けをしそうになった。

例えそうしたとしても、決して時代錯誤の滑稽なことにはならないような、内から輝く高貴さが彼女にはあったのだ。

「ジョエルからこちらへ伺うように言われて参りました。」

そう言って微笑みながら小首を傾げるようにする。

「今夜はどちらへ連れて行って頂けますの？」

気後れを感じなかったと言えは嘘になる。

が、純粹に美しい存在と近づきたいという願いの方がその気後れに打ち勝った。

頭がぼうつとなったまま、その美しい婦人を慣れないエスコートのポーズで伴い街路を歩き始めると、ほのかに甘やかな香りが感じられた。

ディオールでもシャネルでもゲランでもない。

夜気に漂う花の香りのように、自然で決して強くは自己主張をしないフレグランス。

フラゴナールかもしれない、祐里は漠然と思う。

その仄かな香りが神秘的で静かな雰囲気の彼女にはよく似あっている。

タクシー乗り場から乗りこんだ車の中で、臆する意識と必死で戦って、シモーヌに話しかけた。

「今日は無理なお願いをしてすみませんでした。ご迷惑ではなかったでしょうか？」

シモーヌはきちんと揃えた膝の上で重ね合わせた両手をためらうように組みなおして、上品に微笑む。

「いいえ。ジョエルからお話を伺って、ぜひ一緒にできたらと思いましたので。」

それは何故だろう。日本人との同席が珍しかったからか。

あるいは、旅行記者という職業に興味があつたからか…。

そんな卑屈に過ぎる考えが頭をかすめるのは、シモーヌの美しさと自分の凡庸さとの落差が、嫌でも意識されるからだろう。

言葉を探しあぐねる祐里に、シモーヌが自ら答えを差し出してくれる。

ゆっくりとした口調で、言い聞かせるかのようにそれは語られた。

「ジョエルが、アルプスの峠で、貴方に危ない所を助けて頂いた、と申しておりました。」

見ず知らずの人間を以前からの友人のように介抱して下さったと。

そのようなことは、普通なかなか出来ないことだと思えます。

それで、このお話があつた時、ぜひお会いしてみようと思い立ちましたの。」

自分自身の心の狭さを大いに恥じることになった。

この上、何を臆するべきだろうか。

シャンゼリゼの北側に当たる静かな通りに、通りと同じ名のホテルがあつて、

今夜のために選んだレストランがそのホテルのダイニングとして入っている。

ミシュランの星の評価を受けるようになってから、まだあまり年数のたっていない、どちらかといえば新しい店だ。

100年も200年も社交場として派手にもてはやされてきたような大どころの老舗よりは、本来の目的である食事を落ち着いて楽しめるはずだ。

ガイドブックの掲載店といえども、決して知名度だけで選びたくはない。

それが彼の記者としてのこだわりでもあった。

木目調の濃い茶とグレーを基調にしたシンプルで落ち着いた内装のサロンは、華やかな雰囲気こそないが十分に高級感に溢れている。さらにはどこかインテリジェントでさえあった。

物腰の柔らかなギャルソンにお勧め料理を選んでもらい、それに合ったワインを経験豊富そうなソムリエと相談する。

アペリティブに、カシスの香りのキール・ロワイヤル、オードブルには、黄、赤、緑が美しいイトヨリとエクルビスのサラダ、様々なゆで野菜とオマール海老、ホタテなど海の幸をゼリー寄せにして、テリーヌ風に仕立てたもの。

メインには、エスカルゴのパピヨット包み、スズキのソテー・サフランソース、鴨肉のローストなどを試した。

料理はどれも期待以上の盛り付けと味わいで、ワインとの相性も抜群、その素晴らしさがテーブルの雰囲気と和ませ、盛り上げてくれた。

シモーヌは高貴な外見のイメージとは異なり、とてもよく話をする女性だった。

特に音楽、文学など芸術についての造詣が深いらしく、それらに話が及ぶ時には、白い頬にうつすらと赤い色さえ昇らせる。

大学の文学部を出てクラシック音楽鑑賞が趣味である祐里とは、自然と会話が弾んだ。

「先日、マドレーヌ寺院で、ガブリエル・フォーレのレクイエムの演奏会がございました。」

シモーヌの話に祐里は身を乗りだして頷く。

「ご存知とは思いますが、マドレーヌ寺院はフォーレのレクイエムが初演された場所で、彼が亡くなった時にはそのレクイエムによつ

て盛大に国葬が行われた場所でもあります。あのカテドラルの高い天井に、彼の祈りの込められた美しいハーモニーが反響して、私、思わず感動に言葉を失いました……。」

祐里はまるでその場に居合わせたかのように、全身が柔らかかな？ キリエ・エレイソン？のコーラスの響きに包まれるのを感じた。

よく思う事なのだが、パリに限らずヨーロッパの都市の教会の聖堂のように、奥行きがあつて天井の高い石造りの建物の内部では、なぜ音楽があればほど美しい響きと共鳴を生むのだろうか。

そもそもが始めから、あのような長い残響の得られる音場を想定して作られたのではないか、と思われる音楽も、西欧には多々存在する気がするのである。

「僕も、フォーレのレクイエムはとても好きです。他にもいろいろとあるレクイエムの中でも、抜きんでて美しいと思います。天上の音楽のイメージに一番近い、という意見をよく耳にしますね。」

祐里は言葉を選びながら慎重に言った。

「同じレクイエムでも、モーツアルトやヴェルディ、ドヴォルザークなどが、生と死の葛藤を万感を込めて訴える、どちらかといえば人間の側の歌であるのに対して、フォーレのレクイエムは、すでに悟りの境地に達しているというか、人の力の及ばない何かに、自身をすっかり委ねてしまっている、別界の音楽である感じがします。聞いていると、それまで悩んできた事すべてが、まるで大した事じゃないような、不思議な安堵感に包まれる。どうしてなんでしょうね。」

少しばかり、饒舌すぎる気もしたが、ワインの酔いが手を貸していたのだろうか。

シモーヌは、聖堂のひと隅に佇む聖女像のように、美しい夢見がちな表情で微笑む。

「もしかしたらフォーレという人は、生前に天国の夢を見たのかもしれないわね。広田さんは？ヤコブの梯子？、というものをご存知ですか？」

「いいえ。」

祐里は正直に首を振った。シモーヌが微笑んで言葉を続ける。

「こちらでは時として、雲間から斜めに幾本もの光の筋が射すことがあります。その道筋の上を沢山の天の使いたちが昇り降りするのを、たまたま目にする人たちがいるそうです。その光の道を初めて記録に残した聖人の名にちなんで？ヤコブの梯子？と呼ぶのです。時には、妙なる音楽も聞こえてくるとか・・・。フォーレの音楽はそういう夢か幻から生まれたイメージを含んでいるのかもしれない。」

この上ない満足のうちに終わった晩餐の後、シャンゼリゼ通りのタクシー乗り場までシモーヌを送っていった。

凱旋門の方角から吹きつける11月の夜風は、身を切るように冷たく、

街路樹のマロニエの木から落ちた巨大な縮れた形の枯葉が、石畳の上を、まるで大きな蟹か何かのように、ガサゴソと音を立てて這いまわっている。

シモーヌの髪の毛が、一筋、風に玩ばれ、カフェの窓明かりを受けて金色に光りながら宙に遊ぶのを祐里は物憂い気持のまま時折横目で追っていた。

タクシー乗り場の前で、祐里はシモーヌの方へ向き直って、礼を言った。

「今夜はお付き合い頂いてありがとうございました。おかげで、とても楽しい時間が過ごせました。」

「こちらこそ。ご一緒できて光栄でした。」

「また、食事にお誘いしてもいいでしょうか。よろしければ、連絡先を伺えますか？」

「それは…」

シモーヌは遠慮がちに言いよどむ。

「…ジョエルに…従兄にご相談頂けますか？ 今夜のことは、彼に頼まれてのことですから。」

困惑気味に俯いてはいるが、決して迷惑そうではないように思えた。
「もしジョエルがいいと言えば、また会って頂けるのでしょうか。」
暗い街の影を宿していた青い瞳が、祐里に向けられ微笑んだ。

「ええ、ぜひ。」

「ではすぐにでもジョエルに頼んでみることにしましょう。」

別れがたかった。

シモーヌがすでに、自分にとって特別な存在となってしまうていることを、

嫌でも認めざるをえなかった。

彼女の類まれな美しさもさることながら、一番の理由は、心の近さにあるようだ。

もつと多くのことを語り合いたい、そのために、少しでも長く彼女のそばに居たいと思う。

これまで飽き飽きするほど味あわされてきた、パリでの孤独と劣等感の反動なのかもしれない。

積極的過ぎて、相手から疎まれるのではないか、という持ち前の小心を乗り越えてまで、

今、シモーヌとの再会を望んでやまない祐里だった。

いつもはなかなか来ないパリの気まぐれなタクシーが、どういうわけか、その夜に限って大して待つこともなくやって来る。

それでは、と乗り込もうとするシモーヌの、こちら側に残された手

をとつさに捉えて、

祐里は素早くその指先に口づけの真似事をした。

瞬間、振り返って大きく見開かれた夜の色の青い瞳を、後になって幾度も思い出す事になるのをその時の祐里は知らない。

ただ、想いを込めて見つめ、不承不承に別れの言葉を口にする。

「A u r e v o i r , S i m o n e . (さようなら、シモーヌ)」

驚きの表情をゆつくりと優しい微笑みに変えて行きながら、シモーヌは囁くように答えた。

「A u r e v o i r , J u l i e , e t B o n n u i t .
(さようなら、祐里、おやすみなさい)」

走り去るタクシーのバックランプを見送り、茫然と夜風に吹かれていたら、少しく歩きたい気分になった。

凱旋門のあるシャルル・ド・ゴール・エトワールの地下鉄乗り場まで歩き、直通の6号線に乗って、ダンフェール・ロシュローのアパルトマンへ帰ろう、と思いたつ。

ライトアップされた凱旋門の？ラ・マルセイユーズ？のレリーフを正面に見上げ、火照った頬に冷たい風を受けて、余韻に浸りながらゆつくりと歩を進めていると、いつのまにか、隣へ並んで彼に歩調を合わせてくる妙な通行人がいる。

不審に思い恐る恐る目を向けると、金の髪を風になびかせたジョエルの整った顔立ちが、彼に向かって人懐こく笑いかけていた。

「ボンソワ（こんばんは）。タクシーを使わないのですか？」

その唐突過ぎる出現に、祐里は歩きながら歩道に視線を落として、はにかむように笑った。

「少し、酔いを醒まそうと。シモーヌから場所を聞いたのですか。」
対してジョエルもまた、どこか曖昧に笑う。

「ええ。ちょうど近くに居たもので。ディネはいかがでした？ 上首尾でしたか？」

「ああ、お陰様で…期待以上の店でした…料理も…」

それから先は、歩きながら話すべきではないように思えて、祐里は足を止める。

彼に合わせて立ち止まったジョエルに、祐里は向き直り、視線を合わせた。

「ジョエル、今夜のことは本当にありがとう。」

ジョエルは軽く肩をすくめてみせる。

「いいえ。お役に立てれば幸いです。」

「シモーヌは、素晴らしい女性ですね。最初から最後まで、話題が尽きませんでした。」

まだまだ話し足りないくらいだ。」

「それはなによりでした。きつと話が合うんじゃないかと思ったんですよ。」

「もしできれば、またぜひ、食事に誘いたいのですが…。シモーヌにそう申し入れたら、ジョエルに聞くようにと言われました。…どうでしょう。許可して頂けますか？」

ジョエルは、そうですね、と間を持たせておいて、なぜか意味ありげに、

同時に困惑したように微笑むのだ。

「祐里…申し上げにくいのですが…」

コホンと一つ咳払いをする。

「実を言うと従妹は、普段はずっと遠方の国で暮らしているのです。今回はたまたまパリに滞在中だったので、ご一緒させることができましたが…、まもなく帰国する予定です。もし、次にパリに来た時に、ということでも構わなければ…その時はお声をかけますが…。」
落胆を隠せなかった。

が、残念に思うよりも早く、いつもの慣れ親しんだ諦めのよさが、

胸のざわさわ感を一人でさっさと鎮めてしまうのを感じた。

きっと何か事情があるのだろう。そう思うことにした。

もともと、見ず知らずの相手ではあるし、いきなり無理を言って都合してもらった話だ。

何ごとも、多くを期待すれば、それだけ得られなかった時の失望は大きい。

ならば始めから、あまり期待しなければいいのだ。

それでも苦しい微笑に頬をひきつらせて、ジョエルを安心させようと答えた。

「そうですか。では、またパリにいらした時、お時間が合えば、結構です。」

どうか、彼女によろしく伝えてください。」

ジョエルが明らかにホッとしたように、息を抜くのが伝わってくる。「伝えます。ご希望に添えなくてすみません。」

自然と言葉が途切れるうちに、いつか凱旋門広場の地下鉄入口の近くまで来ていた。

この広場は、凱旋門を中心に十本以上の道が交わる放射状のロータリーになっている。

その形から、おそらく、エトワール（星）広場と呼ばれているのだろうと思う。

広場の街灯の下で、ジョエルは立ち止まり、祐里に向かって右手を差し出した。

「ここでお暇します。祐里。急なのですが、またしばらくフランスを離れることになりました。まだ先の予定ははっきりしませんが、戻る時には、きっとご連絡しますよ。またぜひ先日のビストロへでも一緒にしましょう。」

少なからず、不意打ちを食らった感じだった。

シモーヌとのことに意識を奪われ、まさかジョエルとまで、これっきりしばらく会えなくなるとは、思ってもみなかったのだ。

まだまだこれから幾度も会って話が出来ると思っていたのに。
では、今夜、今すぐから、語りあえる友人のいない味気ない日々が、
再び戻ってくるのだろうか。

我知らず、すぎるような情けない目になってしまったのだろう。

祐里の手を握ったジョエルが、ふっと表情を和らげたかと思うと、
そのまま手を強く引き、祐里を胸元に引き寄せて抱擁の真似事をし
た。

驚くには値しない。

フランスでは、少し親しくなれば、ごく普通に交わされる挨拶なの
だから。

「君に会えてよかった。素敵な友人にめぐり合えたことを神に感謝
します。」

耳元で囁かれる言葉にも、途中からどこかうわの空になる。

祐里はその時突然、息苦しいほどの動揺に見舞われたのだった。

抱擁と胸に伝わってくる温もりのせいではない。

記憶に新しい、ごく慣れ親しんだ香りをジョエルの胸元に認めたか
らだ。

フラゴナール？Lune de Miel？…。

シモーヌが身に着けていた同じパルファムの香り。

緊張に身を固くする祐里、そっと身体を離して、気遣わしげに彼の
顔を覗きこむジョエル。

従兄妹なのだから…それも親しい間柄のようだから、服に香りが移
るような抱擁があったとしても、

決して不思議ではないはずだ。

あるいは、同じ香水を好んで使っていたとしても。

そう思おうとした。根拠のない疑念なのだと。

だが、思おうとすればするほど、割りきれない感情が胸に溢れた。

その時、ジョエルの微笑みが、唐突として艶然としたものになる。

類まれな、美しい花のような、あるいは、音楽のような微笑みに。
「そんな顔をしないで。祐里。この世は、決して偶然だけでは成りたない。多くは巡り合わせの結果なのです。・・・そうは思いませんか。」

残念ながら、その言葉によって謎はいよいよ深まり、なんら答えにはなり得なかった。

ジョエルの青い瞳が、物悲しい表情を浮かべ、それでも優しく祐里を見つめる。

「おやすみなさい、祐里。次に会う時まで、どうか元気で暮らしていてください。どんなに離れた場所に居ても、常に君の幸福を祈っていますよ。」

（第3話 フラゴナールの聖母 終わり）

3 フラゴナールの聖母（後書き）

更新が遅くなりました！ 御感想をお待ちしております。
PCからの方は目次の拍手ボタンから非公開の感想をお送り頂けます。
よろしければそちらからどうぞ。

4 カテドラル・ノートルダム

第4話 カテドラル・ノートルダム

パリの長い冬。

鈍色の雲が渦巻く波乱含みの空。

ともすると落ちてくる霰混じりの重い雨。

黒く濡れた石畳に、落ちては消える湿った雪粒の、なんと冷たく感じられることか。

一人きりではとても春までの暗い日々をやり過ごせそうにない、そう思えてくるほど。

12月に入り、街の通りをクリスマスのイルミネーションが華やかに飾るようになって、あの謎めいた束の間の友人、ジョエルからの連絡は途絶えたままだった。

もちろん彼の美しい従妹、シモーヌからも。

年末年始の長い休暇を前に、母国日本の出版社からは、何かと急ぎの入稿依頼が多かったため、毎日朝から晩まで仕事にかかりきりになっているうちに、気付けばとうとうクリスマス前夜、？ノエルの晩になっている。

せっかくのクリスマス・イブである。

例えばちよつとばかり、取引先に不義理をして、仕事の納期を遅らせたって、それらしい過ごし方をすべきじゃないのか？

突如そう思い立ち、居ても立ってもいられなくなって、広田祐里はペンを放り出し、パソコンの電源を切って、電飾にキラキラと輝いている夜の街へと出かけることにしたのだった。

もとより共に過ごすべき相手もいなかった。

街は、通っても地下鉄もどこもかしこも、楽しそうな男女であふれて

いる。

普段から人気のある洒落たレストランの前には、クリスマス・デイナーを楽しもうという客達の行列さえできていた。

ますます思い知らされる、救いようのない孤独にいつそ泣き笑いしたい気分だったが、

とりあえず、今日という日にぜひ行っておきたい場所があった。

シテ島のカテドラル・ノートルダム、ノートルダム大聖堂だ。

ここでは今夜、他のカテドラルと同様に、クリスマスのミサが行われ、終夜祈りが捧げられることになっているはずだった。

カトリックの信者ではないので、ミサに直接参加することはできないだろうが、

少し離れた席で、人々の祈りとコーラス、パイプオルガンの響きに身を浸すぐらいなら、きつと拒まれることもないだろう。

ノートルダムのファサード（正面入り口）の前の広場には、大きなクリスマス・ツリーが飾られていた。

その周りに、大勢のお祭り気分の人々が集まって、青白いフラッシュの閃光を放っては記念撮影をしている。

その騒ぎを後に、石像の聖人たちが難しい顔をして見下ろすファサードの、一ヶ所だけ開くようになっていた木の扉をそっと押して、暗い堂内に入った。

内部は不思議なほどの静寂だった。

沢山の人々が、座席のある後陣の周囲の周歩廊と呼ばれる通路を歩いており、話してもいるのに。

パイプオルガンの音色、司祭の祈りの声も聞こえている。

それらのすべての音が、天空のように高い天井に吸い込まれ和らげられて、

反響が帰ってくる頃には、全く不快ではない、柔らかな響きと共鳴に変わっている。

太い列柱の立ち並ぶ周歩廊をたどって、十字架形をなす聖堂の交差部分、トランセプト（翼廊）まで来た。砂色を帯びたノートルダム・ド・パリ（パリの聖母）の石像が、幼子イエスを抱き、憂いに満ちた眼差しで見下ろしている。

翼廊の両側上部には有名な？バラ窓？と呼ばれるステンドグラスがあるが、今は夜で判然としない。

前に行く若者が、内陣正面の純白のマリア像、？ピエタ？に向かって胸の前で十字を切り軽く膝を折るのを、形だけ習ってアーメンの真似事をしてから、目立たない座席の一つに腰掛けた。

溜息を吐き、ひとり物思いに浸る。

考えてみたら、ようやく物心がついたような幼い頃が、今も続く得体の知れない疎外感の始まりだった。

おそらく5才かそこらだっただろうと思う。

彼は理由もなく、藪から棒にこう思った。

自分は、どこか知らない遠い宇宙の、別の星から落ちてきた異世界の存在だ。

今の両親は実は本当の親ではなく、ずっと離れたどこかの星で、自分の本当の親たちが、

突然姿を消した子供を捜して涙に暮れている。

別段、両親との間に、耐えられないような何かがあったわけではなかった。

何の変哲もない、ごく普通の幸せな田舎の家で育った。

成長してからこの話を母親にした時には、？失礼ね？と痛く憤慨されたものである。

ただ…この先何十年かを生きて行くことになる世界、その未知の現実そのものが恐かった。

自分という存在が、確かなものとして実感できなかった。

それは多少の差はあれ、今も同じだ。

常に完全にはこの世の中に馴染めない感覚、違和感のような孤独感がある。

今生きている現実が、仮の住まいであるように感じる。

眠りながら見る夢の中の様々な世界と、はっきりとは区別しきれない。

その感覚は、生まれ育った日本から離れて、こうして異国の地で暮らすようになり、ますます鮮明に感じられるようになった。

もしかしたらそれは、物質として、実体としての肉体と、そうではない思考体としての自我との違和感なのかもしれない、とも思う。

恐いのはつまり、いつか訪れる、生物としての死。思考も含めた自分の存在の消滅なのかもしれない、とも思う。その短すぎる生……。

だとしたら、その恐怖から、自分を救ってくれるものはなんなのだろう。

あるいは、誰なのだろう。

どうすれば、出会えるのだろうか？

幻を見たのはその時だった。

目で見える前に、前触れを感じた。

何かが落ちてくる。

直感的にそう思ってハッと上を見上げた。

暗い、高い、聖堂の天井の、梁が湾曲して交差している最上部に濃く宿る闇の中から、

旋回する大きな紙飛行機のように、白い浮遊物がゆっくりと輪を描きながら落下してきた。

そしてトランセプトの冷たい石の床の上に、惜しげもなく崩れ落ちた。

何もかもが白一色のひと塊のもの。

まばゆい光を放っている。

まず認識できたのは、差し渡し3メートル以上の白い大きな翼。数ヶ所をベルトで止められているだけであるらしい純白の長い服。携えた白銀の長剣。

天使。

つまり、これは幻覚だ。

周囲の音が消えて、自分の心臓の鼓動だけが意識を支配した。幻覚を見る、という症状は、世間一般では精神状態の危険信号とされているのではなかったか。

自分は知らない間に、どうかしてしまったのだろうか。

よろよろと堅い木のベンチから立ち上がって、床いっぱい広がっている落下物の方へ歩き出す。

彼以外の人々に、床の上の天使が見えていないことは、まったく疑いようがない。

行き来しては立ち止まり、内陣奥のピエタ像に十字を切る敬虔な参拝者たちは、その足で天使の羽や服を踏みつけていることに気付く様子がないのだった。

それでも、今、彼自身の目に見えているものを信じるほかないではないか。

現に、すぐ足の先で、一羽（？）の天使が倒れているのである。

幻ならば、手で触れることはできないだろう。

言い換えれば、手で触れられれば、きっと実体なのだ。

床に膝をつき、天使の肩と思われるあたりに手を伸ばした。とにかく抱き起こして容態を見ようとしたのだった。

その瞬間。天使が消えた。

正確には天使ではない別の物に変わっていた。

白っぽい色のコートを来た人間の姿に。

その床に伏せられた血の気の失せた横顔には見覚えがあった。
ジョエルだ。

抱き起こした腕の中で、彼は薄く目を開いて大儀そうに息を吐く。

「ああ、祐里。君でしたか。」

抱きかかえた肩の厚みに、実体を感じた。

祐里は混乱のあまり堪え切れずに涙を落とした。

彼と再会できたのは確かに嬉しい。

だが、こんな風に憔悴しきった有様の友人の姿など、できれば見たくはなかった。

まして、夢や幻に近い別の世界の存在かもしれないと知らされたことが、いきなり遠くへ奪い去られたかのようにつらかったのだ。

ジョエルの目が、泣顔の祐里に向かって優しく微笑む。

「・・・君に助けられるのは、これで二度目ですね。・・・礼を言います。ありがとうございます。」

ごく落ち着いた口調だったのに、崩れ落ちるように祐里の腕の中に沈んだ身体は、ひどく震えていた。

アルプスの峠で初めて助けた時の様子に似ている。

具合が悪いのだろうか。あの時と同じように。

「大丈夫。」

その返事で、どうやら口に出すより先に思考が読めるらしいと気付かされた。

「医者も病院も要りません。わかるでしょう。我々にとってそれらは有効な手立てではないのです。ただ、少しだけ、休ませてもらえれば・・・。」

「それなら僕の部屋へ来ればいい。椅子に座って待っていて下さい。タクシーを呼んできます。」

今にも駆け出そうとするのをジョエルに引き止められた。

「それには及びません。」

そして、ひんやりとした手がそつと祐里の目の上を蔽った。

「目をつぶって。」

言われるままに目を閉じたら、自分の部屋の雑然としたイメージが自然と頭に浮かんだ。

と思うと、次にはもう、現実はその部屋にいる自分を確認していた。鮮やか過ぎる瞬間移動。あるいはこれもただの夢の続きなのか。

感心している暇はなかった。

腕の中でジョエルの身体が今にもずり落ちそうになっている。意識を失いかけているらしい。

急いで散らかった自分のベッドまで抱えていって寝かせた。

重くはなかった。が、軽くもない。

この場合、在ることを確認できるに足る重さ、という表現が、一番適切だろうと思った。

「何か欲しい物は？ どうしたら気分がよくなりますか？」

祐里はただそんな風に訊ねるてみるしかない。

いったい、天使というものが、何を食べ、何を飲んで栄養源としているのか、

どんな病気をするものなのか、どうすればその病気が治るのか、何もかも見当がつかなかった。

第一、それ以前に、ジョエルが？天使というもの？なのかどうかすら、分かりかねたのだ。

昔からフランス人が具合の悪い時に好んで飲むという、ホット仕立ての赤ワインなんかはどうだろう？

ワインは聖書ではキリストの血として尊ばれているらしいから、天界の住人にも効き目があるんじゃないか？ うちには赤ワインの買い置きがあつただろうか？

それとも、天国の飲み物とされる？ネクター？の名で親しまれている、濃縮還元ミックスフルーツジュースみたいなものの方がいいの

か？

そんなことを次から次へと取り止めもなく考えていたら、いきなり、苦しそうに呼ぶ声で意識を引き戻された。

「祐里。今は何もいりません。ただ、私のそばに居て下さい。そしてもし嫌でなければ、手を握っていて下さい。あの時のように。」
祐里は言われるがままにジョエルの手を握った。

では、あの山間の街のホテルで、深夜、うなされていたジョエルの手を握ってやっていたことを、

ジョエル自身もちゃんとわかつていたのだ。

ジョエルは深い溜息をつく。

「・・・不思議だ。どうしてなのか、あの時も、今も、君がそばに
いるだけで、闘いで受けたダメージが癒される・・・。」

独り言のようにそう呟いて、美しいジョエルは目を閉じる。

「ずっと闘い続けてきた。それを疑問に思ったことも、仮その死
を恐れたことも無かった。」

いつかかならず甦り、また闘うために飛び立つのだと知っていた。
それが今、死を目前にして二度までも、人の子の元に送られ、助け
られている。助かりたいと願い、死ぬことを恐れている。」

祐里の手を握るジョエルの指に力がこもる。

「祐里。君は・・・いたい・・・。」

言葉は途切れ、閉じた目のまなじりから、涙が流れた。

薄い唇が何かを堪えるかのように震えている。

そして解読不能の言葉。

？RTTGH？

その音の連続は、ただ祐里の耳にそんなフランス語のアルファベツ
ト風に聞こえただけで、本当のところは、全く別のヘブライ語とか、
ラテン語とか、あるいは単に天使の嘆息の音にすぎなかったのかも
しれない。

我が身の境遇を嘆く天使と過ごす、それは不可思議なノエルの晩。

（第4話 カテドラル・ノートルダム 終わり）

4 カテドラル・ノートルダム（後書き）

ジョエルの正体はわかりましたか？

白くてきれいな天使と言うお仕事も、何やら楽しいことばかりではなさそうですね。

ご感想をお待ちしています！

5 ラ・デファンス上空

第5話 ラ・デファンス上空

200X年のクリスマスの夜、広田祐里はパリのアパルトマンで天使と眠った。

天使、と言っても、背中に翼らしきものは無いようだった。頭の周囲に光の輪のようなものも見あたらなかった。

シャツ越しに背中の中肩甲骨辺りを手でそつとたどってみたが、何も変わった所は認められない。

息もしている。体温もある。

人間の、彼と同年代の青年の身体だった。

ノートルダムで彼が見た空から落ちてくる天使のイメージの方が、あるいは幻覚だったのかも知れない、だんだんにそう思えてくる。そうであればいい。

安堵して、一度失った友人を再び取り戻したような気持ちになり、傷ついて救いを求める相手に、

手を預けて寄り添った。

幼い頃、寒い晩に、家に泊まりに来た仲のいい従弟と、布団の中でこんな風に手を握り合って眠った。

つまりそれは、もちろん性的な意味など始めからなくて、

ただ夜の闇への恐怖を誰かと手を握り合うことで少しでも和らげたいただけだったから。

「極東、中東の空の上で長い間、戦っていた……。苦しい戦いだった。」

すでにいくらか人心地ついたらしいジョエルは、静かな声で語った。

「人の戦いのある所には、雲の上にも別の戦いがある。知っていた？」

ジョエルの、空のように青い瞳がすぐ間近から祐里を見つめる。

祐里は首を振る。

「天使というのは、神様の代わりにお告げをしたり、危険から人を守ってくれたりする存在だとばかり思っていた。戦いのイメージはあまり無かったな。」

「それぞれ位と役割がある。私は能天使 Powers の一員、冥界の軍勢との戦いが仕事ということになっている。」

「戦い……。原初だけの話かと思っていた。教会には鎧姿の大天使ミカエルが悪魔である竜を足で踏みつけている絵や彫刻がよくあるだろう？」

それがつまり、善と悪の振るい分けで布教の初まりの象徴なのかね。」

「初めだけではない。ミカエルは数万年来変わることなく天の軍の総司令官だ。つまり人間の言い方で言えば、今も昔もということになる。」

なるほど、とさしたる抵抗もなく、すんなり納得してしまう祐里なのだった。

人間世界に関する知識だとて、小学校で習って覚えたのが10才の頃から、つまりたかだか15年。

今また新たに別の世界についての説明を受けたからといって、そちらを否定し拒絶してしまえるほど、人間世界に精通してはいないのじゃないか、そう思ったのだ。

「じゃあ、君の仕事、というのは……。つまり戦闘員だったのか。雲の上の……。」

ジョエルはうなずいて、祐里の肩にそつと顔を伏せるようにする。そして溜息とともに囁くように言った。

「苦しかった。……。戻りたくない。できることなら、もう二度と。」

祐里は何気なく吐かれたその言葉に、思わず息を止めた。

投げやりな逃避の願望のように聞こえた。神様の代理人たる存在が？
何となくこのまま放置すべきではないような、何やら落ちつかない
気分になりかけたが、

きつと、天使といつても、時には疲れて自信喪失してしまうことぐ
らいあるのだろう。

徳の高い坊さん、キリスト教で言う聖職者、あるいは聖人たちだっ
て・・・、

確か、うろ覚えの知識によれば、イエス・キリスト自身だって、
時には神の意思を測りかねて悩み苦しんだはずだ。

そう思い直してみたのだった。

そして次には思い出していた。

アルプス山中のロッジで、ジョエルが眠りながら苦しそうに口にし
ていた言葉。

あの？ Mon Pere？ は、？ お父さん？ではなく、？ 主よ？ の
呼びかけだったのではないか。

「きつと疲れているんだろう。少しゆっくり休んだらいい。

そのくらいの自由はあるんだろう？ その・・・君達にも。」

祐里の言葉に、ジョエルの答えはなかった。

閉じたまぶたはもう動かず、眠っているように見えた。

その青ざめた美しい顔を見つめているうちに、ふと一つの疑問が頭
に浮かんだ。

ジョエルが天使であるなら、彼の従妹だというあのシモーヌはどう
なのだろう。

彼女もやはり、人間ではない、ということになるのだろうか？

もしそうであるとしたら、その事実を受けいれるのは、

友人が人間ではないということを受けいれるのとは、また別の難し
さを伴う。

が・・・ジョエルはやはり答えなかった。

口に出さずとも思考が読めるはずだったから、きつと本当に意識の

活動を止めているのだ。

つまり、眠っているということになる。

こんな風に人間を基準にして考えてしまうことは、もしかしたら非常に的外れなことなのかもしれないが、これまでの経緯を見る限り、ジョエルの様子にあまり人間と違っている所は認められない。

ならば、ちよつと特別な能力を持った他と異なる人間、ぐらいの意識で付き合ってもかまわないのだろう。

祐里はそう思ったのだった。

それでジョエルの？眠り？を見守ってやることにした。

それもまた、彼の持ち前の性格の一つだった。

実際目に見えていて体験していることは、あえて存在を疑ったり変に思ったりはしない。

世の中、そういうこともあるだろう、そんな風に受けとめて成り行きを見守る。

それで自分の身に被害が生じたことは、とりあえず今のところ一度も無い。

短い人生、むげに拒絶して遠ざけてしまうより、いろいろなことを体験した方が面白いだろう、くらいに思っている。

翌日、クリスマスの朝。

窓に目をやると、冬のパリにはめずらしく、明るい朝日が差していた。

ジョエルは…と部屋の中を見まわすと、その視線を感じ取ったかのように、

忽然とベッドの横に白いコートに身を包んだ彼が姿を現した。

手には、紙で簡単にくるんだだけの焼きたての長いバゲットを2本大事そうに抱えている。

「メリークリスマス、祐里。素晴らしい朝だよ。朝食にしよう。今、カフェ・オ・レをいれる。」

彼のコートから、パリの朝の冷気が感じられる。

それにしても、天使は人ではないはずなのに、なぜ、ジョエルはまるで人と同じように、

物を食べたり飲んだり、あるいはそれを楽しんだりできるのだろう。今朝はまたさらに気分が良くなったらしいジョエルは、

祐里の頭の中の疑問に、打てば響くように振りかえり、楽しそうに答える。

「そう在りたい、と思うどんな姿にでも、なることができる。ただ、それだけのことさ。」

では、必要からそうしているわけではなくて、朝食を楽しみたい、と今、願っているわけか。

ジョエルがにこやかにうなづく。

「そう。そして、祐里、君とクリスマスの一日を、できるだけ有意義に楽しく過ごしたいと思っている。」

そうすることが、何よりの休養になるように思えるから。」

それはとてもありがたい申し出だけれど・・・と祐里は眉をしかめて複雑な表情にならざるを得ない。

「それが、そうも行かないんだ。実は、仕事が溜まっていてね。

年末までにもうひと頑張りしなくちゃならない。」

「何の仕事？」

ジョエルは興味深そうに散らかった仕事机の周辺を見回した。

「日本人向けの旅行ガイドブック。今はパリの地図の新しく修正すべきところを調べている。」

今日はどうしても、デファンスまで行ってトラムの新しい路線を詳しく調べてこなくちゃならないんだ。」

「地図。これか。ふうん。よくできている。上空から見た地上の景色にそっくりだな。」

何気ないジョエルの言葉に、祐里は思わず笑った。

「もちろんそうだろう。この地図は元を正せば空中写真をベースにして作っているんだから。」

「空中写真？ 何から撮る？ 飛行機か？」

「そうだ。」

「ならば、君が自分でその高さまで行って、今現在のデフアンスを目で見るなり、写真を撮るなりすればいいだろう。」

その高さまで行って・・・と簡単におっしゃいますが、

都市地図の縮尺に近いミニチュア度で地上を見下ろすためには、少なくとも、千メートル以上の高度が必要だと思うのですがね。

肩をすくめてしまう祐里だった。

もちろん、翼を持ち、思考の早さで移動すると言われる天使族には、至極簡単なことかもしれないなかった。

「そう。簡単なことだ。」

ジョエルは得心顔でうなずいている。

「だが、まずは朝食を済ませてからにしよう。」

もちろん、祐里だとして考えてみないわけではなかった。

例えば、空港に着陸間近の低い高度で、飛行機の窓から下界を見下ろした時。

眼下に広がる都市近郊の街の景観は、

まるでそこに地図が広がっているのかと思うほどの精密さだ。

道路や鉄道の交わり方、土地利用の区分、建物の上から見た形・・・。

日常地図で見慣れている物の形が、本物のミニチュア版として実際に見えている驚き。

なので、仕事上、新しく開通した鉄道や高速道路、都市開発地域などを既存の地図の上に書き込んで図面化しなくてはならない時、いつそ上空から眺めて写し取れば早くて正確なのに、と思う。

飛行機を飛ばして空から地上の写真を撮る・・・。

そんな大それたことを民間の出版社が、しかも、新刊の雑誌か何かならともかく、すでにあるガイドブックの改訂作業のためだけにできるわけがない。

専門の機材と人員を乗せた飛行機を一回飛ばすだけで、大変な費用がかかるのだから。

さて、どうやら気まぐれな幸運が自分の身の上に巡ってきたらしい、と感じるような特別な時には、

そのことについて、あまり深く考えないようにした方が得策だ、というのが彼の持論、というより、

これまでの経験から得た教訓だった。

理由とか根拠とか、そんなことをかんぐり過ぎると、いつのまにか、せつかくの幸運が逃げてしまうような気がしたから。

それで、今、自分はとても特別な状況にあるとは思うのだが、強いてあまり深く考えないように努めている。

足の下には、ただ千メートル分の厚さの空気。というより風。

そして広げた両手の中にすっぽりと入るくらいのパリの街区の10 km四方。

直下には縦横いろいろなガラス細工の棒や箱を寄せ集めたような、ビル林立するラ・デファンス地区の高層ビル街が光っていた。

仕事の邪魔にならない程度に、友人の二つの手が彼の胸を支えている。ただそれだけだった。

地面の無い場所では、実は靴というものは防寒の用途以外あまり必要が無いのだな、漠然とそんなことを思っている。

在り得ないことへの不安は取りあえず横へ置いておくことにして、祐里は今、カメラで地上の写真を撮るのに集中することにした。

「なるほど、新トラムはデファンスからしばらくは地下を通るんだな。その後、SNCF（フランス国鉄）の線路に沿ってセーヌ川の

方へ向かって行く。駅は・・・あそこ、と、ここか。」

カメラを首から下げたストラップに預けて、手にした地図に書き込んだ。

「交差する道との上下関係は… ジョエル、もう少し高度を下げられる？」

「もちろん。」

思えば即座に下方へ移動している。

風も、寒気も、気圧の変化も妨げにはならない。

こうあるべし、と思ったことがすなわち現実となる。

もしそうであるなら、まったく逆に、これまで彼が現実と信じて生きてきた世界が、

実は思考によって描かれただけの仮想世界だったのではないか、と疑ってみたくなる。

とすれば、本当の？現実？に？実在？する自分自身は、今、どこで何をして生きているのだろうか？

どこか知らない場所で、スヤスヤと眠りながら、夢でも見ているのか。

宙に浮いたまま物思いに耽っていたら、背中から胴に腕を回してジョエルが身体を寄り添わせてくる。

肩に頭の重みを感じた。とはいえ、さほど重くはなかった。

「こうしていても、仕事の邪魔ではない？」

遠慮がちに聞いてくる。

まるで母親を慕う子供だ。

そう思ったら、思わず笑みが洩れた。

「抱きつかれているのに、不思議と邪魔ではないな。きっと、？仕事の邪魔にならない程度の接触度？に保つよう調節している、ってわけなんだろうね。」

ジョエルが笑う。

「察しがいい。」

祐里は苦笑した。だんだん天使との付き合い方が分かってきた自分自身がおかしかった。

「必要なら、そうしてればいい。でも、このまま撮影を続けていて大丈夫なのか？」

もし、気分が悪かったりしたら、そう言ってくれ。夕べみたいにいきなり地面に墜落されるのは困る。」

ジョエルはジョークに答えるかのように、楽しげに笑った、

「大丈夫だ。こうして君と触れ合っていれば、パワーが保てる。」
それで構わず仕事を続けることにしたのだった。

脳の奥で声が聞こえた。

「なぜ、拒まないのだ。祐里？」

その声はジョエルのようでもあり、自分自身のようでも、あるいはまったく別の声のようでもあった。

「天使だろうが何だろうが、相手は外見上、明らかに一人前の大人、しかも同性ではないか。」

抱きあったり、一緒に寝たり、そんなことをして不安は無いのか。

異常だと思わないのか？？

祐里は心のうちで答える。

「くだらない。魂と魂の問題に、年齢や性別、外見あるいは人であるかどうかを云々する必要があるのか？ 関係無いだろう。そういうことは、性愛の問題になった時にだけ考えればいい。僕はそう思う。」

「魂と魂の問題…？」

僅かな沈黙の後、声が答えた。

「確かにその通り。君は正しい。」

(第5話 デファンス上空 終わり)

6 モンマルトルの画家

第6話 モンマルトルの画家

クリスマスからの3日間、ダフェール・ロシュローの狭いグルニエで祐里とともに過ごした後、

？少しパリの街を散策してくる？と言って出て行っただきり、ジョエルは数日経つても戻らなかった。

大晦日。外はまた湿った雪とみぞれだ。

寒さで風邪をひくことなど、天使であるジョエルには在りえないのだろうが、

少なくとも彼が知る限り2回は具合を悪くして空から落ちてきたわけだから、

祐里という間に回復しつつあったとはいえ、やはりその後の容態が気遣われた。

例えば街中に彼を探しに出かけるようなことが、まったく馬鹿げていることは、始めから分かりきっていた。

相手には翼というものがあるわけだし、何より思いさえすればその思った場所へ行くことが出来る種族だ。

まさに神出鬼没の存在を、2本の足またはせいぜいオンボロ・プジョーでガタゴトと地面の上を移動することしかできない生身の人間が探し出せるわけが無い。

それでも居ても立ってもいられなくて、取材の用事にかこつけてはパリの各所に足を運んだ。

そのたびに、辻々の教会の扉を押して中を覗いてみる。

またトランセプトの辺りにでもへたりこんでいるのではないかと、わざわざ暗い堂内まで入ってみる。

見つからなかった。

後から思えば、そもその始めから探すべき場所が違っていたのだ。

パリの北、モンマルトルの丘付近に、どうしても場所を確かめておきたい物件があつて、バスに乗って向かつた時には、仕事の成果以外、何も期待していなかったのが本当のところだ。

時間は夜ではなかったけれど、薄暗い曇天の下、大通り沿いに所狭しと並んだアダルト・ショップには、女性ヌードの輪郭をかたどつたシヨッキング・ピンクのネオンがピカピカと輝き、パリの他の地区にはあまり見られないこの界限独特の雰囲気を実に物語っている。

モンマルトル、と言えば、『アトリエ洗濯船』を始め、ピカソ、ダリ、ユトリロなどの画家達ゆかりの街として有名だが、ロートレックが足しげく通つたという老舗キャバレー『ムーラン・ルージュ』の電飾された風車が象徴するように、その一帯はパリ最大の歓楽街として知られる界限でもある。

怪しげな店の並ぶ狭い路地から、登り坂のずっと先に、縦に細長く切り取られたサクレ・クール寺院の異様な白いドームが威圧するようになり立ちほだかる。

自分が世の中に馴染めない、異質な存在なのではないかと言う居心地の悪い違和感は、

こんな時、胸の内側で一つの頂点に達する気がした。

そして辻を曲がって、冬だというのに観光客目当ての似顔絵描きの画家達が、所狭しとイーゼルを並べるあの有名な広場にさまよい出た時。

ジョエルを見つけた。

数秒間、本当にそうだろうか、と目を疑った。

およそ彼に似つかわしくない、人でこつた返した埃っぽい場所だっ

たから。

それに、祐里の知る限り、常に白またはそれに近い色の服を身に付けていたはずの彼が、

今、黒のタートルネックに黒のトレンチコート、黒のスラックス、と見事に黒一色の服装だったから。

そのことだけでも十分に、彼だと決めつけることを祐里にためらわせたのだった。

似顔絵描きの画家の一人の隣で、折りたたみの小さな椅子に浅く腰かけている。

自分の膝に頬杖をつき、画家の描く女性観光客の絵に熱心に見入るらしい。

その青い瞳が間違いなく探していた相手のものだとうやく確信できたので、祐里はイーゼルと作品の飾られたパネルを縫うようにして近づき、そつと彼の前に立った。

わずかに落ちた影の気配にジョエルが目を上げる。

「祐里。」

一瞬目を見開き、すぐさまにこやかに微笑んで、ジョエルは椅子を立ち祐里の手を握った。

どんな顔をしたらよいのか分からなかった。

散々心配したのだということをあえて伝えるべきではない気がした。ほぼ一週間振りに見るジョエルが、とても元気そうで生気に満ち、屈託のない笑顔を上気させてさえたから。

きつとこちらが知らされていなかったというだけで、十分楽しい充実した日々を送っていたに違いない。

それでこちらへ連絡することなどすっかり失念していたのだろう。それを責める権利など、これっぽっちも自分にはないのだ、と感じて、一瞬のうちに意識がずつと後ろに引っ込んだ。

「祐里、君に友人を紹介するよ。きつと驚く。君と同じ日本人だ。」
弾むようにそう言って、ジョエルはすぐ脇でキャンバスに向かっていた長身の男に呼びかけた。

「アズル、前に話した僕を助けてくれた日本人の旅行ジャーナリスト、祐里だよ。」

アズル、と呼ばれた男は、筆を動かしながら顔だけをこちらへ向け、切れ長の鋭さのある目を細めてわずかに会釈した。

「祐里、彼は東流。日本人だ。漢字では、東に流れると書いてアズルと読むそうだ。」

そしてジョエルは、その東流という男の黒いジーンズ地の前掛けを締めた細い腰に、何気なく腕を回して身体を寄せた。

その動作がとても親密そうに見えて、胸に鋭く小さなものが突き刺さった。

ああ、きっと、この男も、自分と同様、触れ合うことでジョエルにパワーを与えられるというわけだな、

そう思っただけで自分を納得させようと努めたのだが。

心臓が不規則な脈動を刻むのを祐里は止められなかった。

何だろう。この、逆撫でされるような抵抗感。

東流。あずる。日本人ではあまり聞かない音の名前だ。雅号かペンネームだろうか。

むしろ、欧米で書かれた小説のどこかで、そんな名前を見たような気がするのだが。

あれは何の小説だったろう。

あるいはそこに、何か大切な答えがあるようにも思えるのだけれど。

そして東流と言う名の男をもう一度見てみた。

髪が長かった。黒髪で腰に届くほどの長さがあり、後ろで無造作に一つに縛っている。

背が高く細身で均整の取れた体つきだ。

気に入らないのは目だった。

優しすぎる。

特にジョエルに向けられる時の彼の眼差しに満ちる優しさが、研ぎ澄まされたような彫りの深い二枚目風の面立ちとまるで釣り合

っていないのだ。

いや、これはもう、公平な評価とは言えないかもしれない、と祐里は頭を振って、

邪念を追い払おうと努めてみる。

そうだ。ジョエルを横取りされて納得が行かないから、相手をそんな風に悪く言いたくなるのだ。

だとしたら、何と醜く、嫌な感情だろうか。

祐里は自分で自分が堪らなかった。

こんな思いをするくらいなら、さっさとジョエルへの心配や執着心を捨て去って、この場を立ち去ろう。

それが自分のいつものやり方だったはずだ。

立ち去って、今まで通りの、孤独ではあるが何一つ変わったことのない普通の生活に戻るのだ。

「ジョエル、元気そうで安心しました。じゃ、僕は仕事の途中なのでこれで。身体に気をつけて過ごして下さい。」

言葉が必要以上に丁寧になるのは、砂を噛むような感情の何よりの表れだった。

真実の気持ちを無理に押し殺して、当り障りの無いことを言おうとすると、いつでもそうなる。

だが、ジョエルはまだ、彼のそんなひねくれた習性を知りはしないだろう。

「待つて。祐里、もう間もなく、東流の仕事が終わる。三人で一緒に食事でもしよう。いいだろう、東流。だから、あと少しだけ待つてくれないか、祐里。」

頼まれたってごめんだった。

一体何の話をすると言うのだ。見ず知らずの同郷人と、そしてそいつと仲むつまじい天使と三人で？

「仕事が詰まってる。悪いが、またの機会に。東流さん、お仕事中心にお邪魔しました。」

大晦日、一年の最後の日に仕事が終わっているというのは、かなり不自然な言い訳だったが、今はそんなことに構ってはいられなかった。

最後はわざわざ日本語で言つて、東流の慇懃な返礼も見ずに、振りきるように背を向けた。

背中にするような視線を感じたような気もしたが、どうせ思いこみというやつだろう。

そう決めつけて雑踏のただなかへと逃げ込んだ。

つまり、独占意欲が強過ぎるのだ、と指摘してくれたのは、中学校の時のベテラン女教師だった。

クラスの中にたった一人の親友しか作らず、その友人との関係に一喜一憂するばかりで、他のクラスメイトには目もくれない。

時には、傷つくのを極端に嫌つて、あえて友達を作らずに一人きりでいる。

？他にも沢山、君と友達になりたがっている生徒がいるんだよ。もう少し、心を開いてごらんよ。？

オバハン先生は廊下の水道で並んで手を洗っていた時、優しいけれどどこか射抜くような深い眼差しで彼を見つめてそう言った。

そのころの面倒な性格は、今もまだ変わっていないらしい。

いっそ、あのアルプスの峠で、ジョエルと出会わなければよかったのだ、などとやけを起こして思っているのである。

寂しかった。

失うこと、傷つけられることを恐れずに、安心して心を開ける相手が欲しい……。

その、まだ見ぬ相手と、寄り添い、手を握り合つて眠りたい。

望むのは、本当にただそれだけなのだ。

……子供っぽい我儘に過ぎないのだろうか。

あてどもなく大通りに沿って歩くうちに、いつのまにか北駅と東駅の雑踏を過ぎてサン・マルタン運河のほとりまで来ている。

ここは彼の好きな場所だ。

この狭い運河は、人が作った船の通行のための水路にすぎないのだが、ロックと呼ばれる運河を水門で堰止めた水たまりが、それぞれ水位の違う段々をなして街並みを映しとり、その上に大きくアーチを描いてかかる歩行者用の階段状の橋とともに、静かで懐かしい風情を漂わせている。

自動車による輸送が一般化した昨今は、運河を上り下りする船を見かけることはあまりない。

おもに観光用のクルーズ船が一日に何便か通るくらいだった。

それで水面が静かなのをいいことに、石を投げて？水切り？を楽しむ子供、時には大人だっていたりする。

普段なら間違ってもそんな子供じみたことはしないはずの祐里だったが、

今は何やらむしゃくしゃとしていた上に、たまたま爪先の前におあつらえ向きの平たい小石を見つけたこともあり、それ拾い上げて、肩を下げたポーズで水平方向に思いきり繰り出した。

惜しい。2回半。

水中に消えた石が後に残した波紋の先に、たたずむ人影があった。スーツにコート姿の若い女性。微笑んでいる。

きつとずいぶん大人げない行いだと思われたに違いない。

赤面して目をそらそうとした時、ハッと息を飲みあわてて視線を戻した。

間違いない。シモーヌだった。

ラファエルの絵画から抜け出た聖母マリアのような美しいシモーヌが、運河の向こう側に立って、祐里に向かって微笑んでいるのだった。

(第6話 モンマルトルの画家 終わり)

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6716s/>

雲の彼方

2011年11月13日12時36分発行